

隨緣 不變

本質の眞如の理性は不變にして、絶對觀念態は永恒不變、眞如の體、常自寂靜湛然、本來常恒自性不動なり。

隨緣は眞如の力、即ち徧動力は一大意志態にして、意志は動力なるが故に、常恒に變動體にして、宇宙現象の方面に、時間的、空間的の形式に世界を發開して、染淨の相を呈し、動力の故に時間的に生滅轉變の波を起し、空間的には相互鬭争の浪を揚ぐ。之を眞如自性を守らず、隨_ニ迷悟緣、舉體運動して染淨の法となる。是れ隨緣の義なりと曰ふ。

眞如不變の方面は、本質自性にして、是永恒心靈態なり。實體にして體あれば相あり。永恒精神の相は即ち絶對觀念態なり。精神の力即ち意志の力が舉體動力を呈して顯動したるものが現象界なり。現象界の力に實現せられたるを客觀的觀念界と云ふ。

客觀觀念態なる現象界は、徧動力に内面より壓出され、眞如の實體の動力にして舉體運動なり。實體の動力實現の天則秩序的に實現せる、之を外より觀れば、因果律に顯はる。依他起性とは眞如徧動の隨縁の實現を外より觀じたるものなり。

眞如の心靈態は理性態なれば、動力にて萬物を時間的空間的形式に實現するに、天則秩序ありてよく整齊せるは、蓋し理性態なればなり。

眞如の不變と依他の無性と所執の理無とは、三義三性一際にして同異なし。此れ即ち末を壞せずして而も常に本なり。

眞不變を離れたる世界萬有として象は、天則秩序によりて實現せられたる、因果律の萬有は、眞如の本體即ち一大精神態を離れては、相とし性とし有るなければ、因果規定の現象其ものには、實體を離れて現象の性あるに非ず。物心二象となりても、同じく一大觀念態が、物心二象即ち主觀客觀の觀念態として、觀念が實體と顯現するまでにして、其の本質は不變なり。執性の理無も、萬物に實我の執するは、理に於て未

だ眞源を悟らざるが故に、萬物に各眞理を離れたる實我の執を計するも、その理無の理は同じく不變なり。其物自身が未だ其眞理を意識せざるまでにして、眞理そのものは不變なり。

經に「衆生即ち涅槃なり實に滅せず」と。實現せられたるも本質は永恒心靈態、即ち内面の眞如は本來不動なり。表面の衆生の依正色心なれども、内面本質の理性は本來不變なり。

眞如の隨縁と、依他の似有と、執性の情有と、約して此の三義に由つて、亦無失、此即ち不動本而常末なり。

眞如徧力に實現せられたる、天則秩序の理性によりて、萬物は統一せられ、この理性の規律に隨て動くべきものが、即ち世界の因縁相關によりて、因果律に生産し、普遍性の自然律の變易律が因果律によりて相關より種々に變易す。因果律は普遍性なれども、因果相關の關係によりて種々に變易す。進化説の感應孚化の理と同じく、依他

には衆生も種々無量に變易す。然れども其中に普徧の性あり。

執性の情有とは、執性は因縁相關の普徧性より、執性は各個人が感化應化の變易の理法によりて、一切の有情は各特殊の身體と共に特殊の性質と變ず。各自は依他の關係によりて規定せられたる自己の性を自ら知らず、各自己の性を自ら知らず、各自己の特殊の性を實我と執す。然れども規定せられたる自己の性格を固執して實我と執するも、執情なるものは因果律の理法により各自を實我とするも、因果律を離れて其の體なし。因果律は天則秩序を離れて體なし。眞如の徧動力によりて實現せる世界は、天則秩序の理法あり、即ち因縁相關の理性なり。因縁相關によりて種々に變易す。變易の理性によりて種々の性質と變化す。徧計所執性は各自に一大勢力より種々に發展せられたる各個々は、相互爭鬭の理性よりして、進化の爲に反對の方面に發達して、種々變化を生ず。相互爭鬭は向上の手段たるを知らず。

徧執に普徧と特殊とあり。普徧の理性は相關の理性より感應して變易す。例せば父

母の兩異性によりて其の子の資性を遺傳する中に、自から感應によりて變易するが如く、偏は片なり倚なり、相待の物には何にか偏執あるを免がれず。

一には眞如が勢力に發展せらるるに、隨縁に相待に分るるは、理の自然、相待には、必ず偏なき能はず。

次に、依他因縁相關には感應に（ ）理性によりて變易す。

偏執性は變易の理法によりて、偏したるは之を脱却すべきの理なるを知らず、之を固執するを云ふ。執性よりして一切の有機物は種々に變化し無量の性を顯はすに至る物の普通の性なるは依他にして特殊なるは偏性なり。特殊の性は遺傳としても自己の習慣としても、之が爲めに一切の生物普遍特質は民族にも家族にも兄弟普遍に各自の特殊の如き、種々無量に偏性を呈す。身體と共に心的變質は遺傳としても顯はる。經に曰く、法身五道に流轉するを衆生と名づく。

圓、依、執の三性共に不變と隨緣の兩面あるは、不變は普徧理性にして、隨緣は特殊なり。然れども此の普徧の不變性と特殊の隨緣の特殊性とは非一非異なり。前者は本質にして後者は現象なり。前者は理性にして後者は感性なり。

圓 性

圓性が隨緣して染淨を成すといへども、恒に自性清淨を失はず。自性を失はざるが故に、能く隨緣して染淨を成す。猶し明鏡の染淨の相を現すも、恒に鏡の明淨を失はず、明淨を失はざるのみにあらず、方によく染淨の相を現す。淨染の相を現するが故に、鏡の明淨の體なることを顯はす。眞如の理また然り。性淨を動かすして染淨を成す。染淨を顯す爲に方に性淨の體の理を顯はす。

直に染淨を壞せずして性淨を明すのみにあらず、亦乃ち性淨に由るが故に方に染淨を成す。此の故に二義全體相收して一性無二なり。豈相違せんや。

絕對觀念態が絕對意志の力に實現せられたる客觀々念界が隨縁の世界萬有となり、物心二象と現するも、本の本質なる絕對觀念體は失はず。同一の觀念態が主觀客觀悉く物心二象と現はさるればなり。現象の二象は異なるが如くなるも觀念態の本質は不變なり。觀念態が失はざるのみにあらず、能く力に實現せられて物心二象となる理は、明鏡の觀念態は鏡の明淨の如く、實現せられたる物心二象は、影像の如く、萬物の物心の二現象なるものは、本觀念態なり。物心二現となるも本質の一大觀念體なるを失はず。否失はざるのみにあらず、物心二象と實現してこそ、却て正に實體の觀念態を顯はすなり。

一切の色心二象の現象は、實體の觀念態なくして、いかにして實現すべきものぞ。宇宙萬有乃至衆生の精神身體及び一切五陰十二入十八界は實體の觀念體が現象にあ

らすや。

依 他

宇宙萬有は一切悉く因縁相關的に、時間的には因果律に萬物生ず。依他の中の復因縁似有顯現するといへども、然れども此似有は必ず無自性。諸の縁生は皆無性なるが故に、智論に曰く、

一切の法を觀するに、因縁より生ず。因縁より生ずれば即ち無自性。無自性の故に、畢竟空。空とは般若の義。此の縁生によるが故に、即ち無性を明す。涅槃の因縁の故に有なり。無性の故に空。此即ち無性即因縁、因縁即ち無性なり。是を不二法門と云ふ。

依他因變生とは、前の眞如不變隨縁は實體の二方面より。依他因生は世界の方面なり。眞如が萬有を實現するには、天則理性の秩序をなす。世界の方面には之を因果律

と見ゆ。勢力は内面の動機、因果は外面よりなり。

外面より觀すれば、萬有は因果律に生産し、因縁相待規定なるものは、自己に定性なく、相互の關係を離れては生すべきものにあらざればなり。

因縁似有とは、因縁に規定せられて生存する萬物は、空間的には因縁の相關に、時間的には因果の關係によりて、成立し、この相關の規定を離れては無自性なり。

若し之を空間的に云はゞ、太陽と地球との關係の如く、また空間無數の天體は相互の關係によりて成立し、太陽の關係によらざれば地球は活動すべからず、地球に緣らざれば月球は運るべからず、空間は相待に關聯すること網狀をなして、時間には因果の關係は鎖の如くに連るなり。人の身體の骨節鎖狀を以て關係して其の中間に斷あることなきが如し。

若しこの因果の關係は、生物の進化の理に於ても、原始の生物より、親より子に傳へ、子々孫々一系聯綿し、因果の關聯によりて、生物の原始より其の間に於て間斷あ

ることなし。又十二因縁の無明は業により識を生じ乃至生死等乃至、一切相待規定せられたるものは、因縁の關聯を離れて孤立するもの一として有ることなし。因縁を離れて成立すること能はざるが故に似有と云ふ。

無性とは依他相待のものは、圓實性の實體を離れては有ることなし、故に無性と云ふ。

因縁所成の上より見れば似有にして縁を離るれば無の故に無性と云ふ。故に二義全體相收して畢竟不二なり。

所 執 性

復、情に當り執に稱て有を現すと雖、畢竟じて是無なり。無の所に於て、横に計して有と謂ふ。

今、木抗に横に鬼ありと見るが如し。然るに鬼は木に於て畢竟は無なり若し其れ木

に於て鬼無にあらずんば、即ち横に鬼有りと計すと名づくべからず、木に於て計に由るにあらずるを以ての故に。今既に横に計す。明に知る、理無なり。所執性は迷、實我實法を執する是理性の偏計なり。理性に於て計すると共に、意志と感情に於ても偏執なり。依他は普遍的の因縁、即ち天然規定として、自然の約束にして、是今宗に於ては天則秩序の萬物を發展する手段として必要なり。

次に所執性は普通の因果規定として生物に偏に種々特殊の偏執性あり、是れ形氣の稟けること各別なるなり。

第二の因縁に規定せられたる上に、各々特殊の性質をうく。普遍性は人の精神に知力感情意志あり。また唯識の百法の中の有漏の法の如きは普遍性なり。また人の生理に營養生殖欲の如き、人の精神に心理と生理學的の人生に缺くべからざる要素の如きは、天則の理性による。またこの規定は天則的に因果に規定として生れたる萬類に第三の偏計執性。因果規定によりて生理普遍の中に於て特殊の偏執性あり人の形氣の各

別なることは各其の面貌の異なるが如く、是實我の内容にして普偏より逸出して各自の内面の實質を顯はす。或は貪戾の度の強きあり、瞋恚深きあり、嫉忌慳貪の如き、猛勇なる、柔弱なる、溫和なる、暴嚴なる、沈着なるあり、陽氣なる如き、普偏の平行點を超えて偏執性をなす。

斯の如き人に偏性ありて平行を保つこと能はざる時は種々の性質となる規定は、先天的には父母及び祖先の遺傳としては身體及び精神の質を稟け、或は多血質膽汁質粘液質神經質の如き、後天的には教育境遇の如きは人の種々の性質を規定す。

法身の一切智と一切能

法身、即ち天則秩序を統一し制裁する處の神は、常恒不斷に自然の方面に向うて萬有を創造建設運轉活動せしむることは、天地萬物の行はるゝを以ても、之が常恒建設運動せしむるの機能なかるべからざるは數の理なり。萬物の成る、若し之を人類に比例せば、神は一切知と能とはなかるべからず。看よ秩序の整然たる條理の貫徹せる毫も無明矇昧の盲目的運動の結果とは見るべからず。大にして天體の運動また地上の萬物皆な物理學的器械學的生理學的に植物學一切の學理的に成生せざるものなし。

佛教にては衆生心を立脚地として、世界萬物を説明するが故に、衆生心本來高等に發明すべき智性具備するに拘らず、未だ開顯せずして唯生理的に精神生活するを無明とす。故に衆生に暫く無明を自覺せしむるは智的宗教の啓蒙の爲に必要なり。

若し異教の語を假りて云はば、被造物の人は無明なるも、世界萬有を開展する神は

衆生を成生するに完全たる智を以て作る。いかにとなれば動物解剖學的にも生理學的にも實に至れり盡せり。眼球一個髪一すじも精妙なる構造組織ならざるはなし。たとひ白痴といへども其解剖上生理學上の構造は完全ならざるはなし。

故に自然界に行はるゝ萬物の成生は悉く、いかなる萬物の微少なるも、一切智能の能力自然萬物中に存在する理性なり。神が自然天則によらずして成生すべき萬有なし。萬物の中に神の性能はやどれる故に一切智能と云ふ。

無明と一切能

萬有に徧在せる一切知能は、萬物を構造成生する爲にのみにあらず、萬有の內的生活にも其分を分賦せり。衆生は內的に其分與をうるも、智は高等なるを以て奥に伏在し、能が先に活動す。微少生物も生活運動するは高等なる知と能とによる。乃至人類にしても人類には高等なる理性を具有すれども、孩兒は只不識的に本能的に活動す。

小兒も生活に必要な營養機及び啼運の如きは皆な能のあらはれ、生活々動は胎兒といへども自然に行へり。小兒の内的生活の發達する順序は、感覺にても、味覺觸覺先づ發展し、知覺感情より意志等に進み、感覺等は動物共通の方面、先に發達し、成人するに隨て人の理性發達す。

若し人類を中心とすれば、人格を形成せる理性が發展し、理性の光によりて、自己の生理的生活の精神及び身體を指導し制裁し、而して人生を完成すべき、なかに、劣等なる動物共通の生活のみが發達し、高等なる理性未だ開發せざれば、是を無明と名づくへし。

尙宗教は、人格の常なる理性を以て人道を實現すべきは勿論なれども、人類に人類または國家の一員たると共に宇宙全一の内的存在即ち神によりて賦せられたる内的生命を有すれば、其一員たる義務を盡すべく、また其本源より賦せられたるその靈性を有すれば、之を開展して其使命を果さざるべからざる天分を有することを自覺すべき

ことを要す。其道を教ふるは宗教なり。

故に佛教にては絶対圓實性の如來の本底より分れたる佛性を有する故、之れを展開し、すべての精神生活を靈化し解脱して、眞善美の佛界に到達すべきを目的とす。之を自覺せざるを無明とす。無明とは生理的衝動、動物共通の内的生活なり。

自然科學の職能

自然現象を研究するに最も精密を要するものは自然科學なり。自然科學の研究し説明する處は、之を宗教より云はば、神が一切知と能とを以て、天則秩序をなして、世界に産出せしめたるものは、悉く因縁相待規定因果律に成れり。之を一切知能はいかにして動物の身體を組成し構造せる哉を解剖して其知を得るが即ち解剖學にして、またそが上に生活せる理由を知るは生理學にして、植物學、物理學一切の科學は、悉く神の造化する事々物々の上に於て其秘密を窺むる外に科學なし。故に科學とまた自然

科學を基礎とする唯物論的哲學は、天則生産門の方面を根底として研究する學問なり。宇宙の内存と人類の精神の内に伏在せる靈性との關係は措いて論及せざるなり。自然の一面のみに分業的に研究するものなる科學を基礎としながら、綜合して内外兩面に互るは僭越なり。實に神の一切知能不可思議の力を以て此世界に及ぼしたる成績を、相待的智識の人間が全部を研究せんとすは不遜なり。宗教といふも階段あり。幼稚なる宗教なる自然教にては、自然現象の上を論するの餘に他なきは、意識が幼稚なるを以て、超然たる靈界は信認するの意識なきものなり。

衆生の體性

自然界を開展するの法身は天則秩序の一大原則なり。自然界の萬有は因縁因果の理法によりて成立し、即ち相待に規定せられざるものなし。萬物は相待規定せらるれども根底には絶對なかるべからず。

今法身は相待の方面に向て萬物を形成するの法則をなす。一切智と能とは其屬性にて、相待萬有を作為し建設し造作するに必要な知と能となり。如來は萬有内存なれば、萬物の內的に存在して統制し造作す。例へば人の胎兒につきて云はば、胎兒其ものゝ内には法身の分子にて其身内に身心の機官の性能を有して成長し、其兒の身體が解剖學的生理學的に形成しあるは、其内存法身と一切知能との存すればなり。小兒自らは本より何の知も能も有するにあらざれども、生理の自然律が即ち一切知能なる故に、法身の一切知能は自然界の萬有内存として萬物造化の功用をなす。萬有内存して制作すると共に萬有內的生活の性能に知と能との性を分賦す。

身體成長してまた知と能とのはたらきあるはその分なり。攝取の法身般若解脫は一切知能と同じく相と用となれども、其はたらきの方面を異にす。前のは自然界に向て制作事業の知能にして、また其本體なれども、此れは相待の方面を轉じ、神の性に向て絶對に歸すべきの契機法則と及び智と能とにて、衆生の內的生活即ち精神を相待の

方を轉じて絶對如來性に合一せんとの勢能なり。

故に自己の性の本體が如來實性なることを悟り、自己の知と能と本より如來の自性智能と同一なるを證り、自己の知は如來と同一なれば如來の自性を證することを得。用に於て同一なれば解脫靈化して佛の業用をなすことを得。終局の方は如來の自性に歸趣せん爲なれば自然界方面に求めず、直觀的觀念界に向て如來と合一することを得。如來の自境は心靈體なれば、感覺すべきものに非ず。直觀すべき對象なり。感覺は相對直觀は絶對なり。感覺は有限にて直觀は無限。感覺は生滅變化し、直觀の方は常住不變なり。

生産の目的

天則に本づき相待世界因縁に規定せられたる衆生、大より小に向て分出したるも、本來萬有内存の神なれば、鑛中の金たる衆生、天の大より地上生物の小に至るまで、

本一體分身の萬物、相互に相次に競争し擾々紛々種々難多と姿を損ひ身をやつし各々自己の本分に就て活動す。

如來藏無盡性の發現、華嚴に説く如く、世界人類は勿論一切衆生悉く體に相即し用に相容す。此關係を今日の生活資具に就て考ふるも、一の食器一本の筆と云へども、之を製造するにつきてのそれ々の關係は、實に全世界の人百般の工業商人等の手に關せざるなし。斯の如く重々無盡複雑極まれる手を要して文明の世に吾人を生活せしむるは是手段にして、終局目的に攝取せんが爲めの手段なれば、吾人は一秒間も唐らに時光を損つることを忍びざるなり。

また生物進化の理に就いて考ふるも、吾人は人類中愚なりとも文化の世にあり。佛教の如き高妙なる理義を會解するにいたる。こゝに至るまでの、原始生物より生存競争中に漸々に勝利を得て、無數の世代と階段を経て人類となり、まだ不斷の競争の結果文明の中に生活し、原始生物より無數代は皆我爲に犠牲として我を目的に達せしめ

んが爲と信する時は、直接の神の恩寵、間接の分身隨類の神の恩寵何れの方面より觀るも、其恩寵に對しては感謝の念禁じ難し。愈々その目的を達せざるべからず。

尙進みて終局目的に導く宗教教義につきて見るも、最古の宗教より數百代にわたりて精神を鍛へ進化し發達し、釋尊に到りて大成し、世の光となり、また三國を経て無數の高僧知識の苦心慘憺研究練磨の功を経て、今日の佛教と顯はれたり。

吾人の宗教心を養ふに、幾百千代の高徳はいかに艱難せしぞ。之れ悉く如來の方便力と信する時、いかでかその如來の目的を達せざるべけん。

如 來

宗教意識を設定せんには宗教的關係の客體なるものはいかなる權能を有すべきものなるかを確定すべし。

客體なる本尊は獨尊統攝歸趣の權能を有するものとす。即ち一切宇宙萬有の頂上に位し一切の天則秩序より出づる萬類を統一し保存し一切を圓滿に形成せん爲に萬類を攝して終局目的に歸趣せしむる理性を教ふるものなり。

宗教意識は自己が現在依止する世界の性能、有爲即ち相待規定なるものは生滅變易常なくこれ畢竟の依處に非ざるをしりて、無爲即ち絶對無規定なる實體を求めて依屬するにあり。即ち畢竟の依處を求むるにあり。

かゝる相待規定の世界體に對して客體なる神は唯一獨尊として宇宙萬有を統攝し、また宇宙の終局目的として歸趣すべき絶對理性なりとす。

斯る權能を有する唯一の本尊を、世通じて神と稱す。然るに神に多種あり宗教意識の程度に隨て之に對する客體の神の觀念も亦勝劣相同じからず。最高等なる宗教意識に認むる處の神を表象する名稱を選ばざるべからず。大乘佛教に説く處の佛陀の名稱甚だ多し。絶對唯一の如來を表はさんが爲に或は體により相にまた用によりて如來を示すに過ぎず。一の如來を種々の方面より見たる表象に外ならず。

一切多數を總括して遺さざる唯一の眞の神を表するにアミトの名稱を以てす。時間にもまた空間に遍在して餘すことなき唯一の神靈態無量光壽の義なり。

一切を統一する別號をアミトと號し、總じて云はゞ如來と云ふを得べし。今は如來の名を以て宗教的客體の神を稱す、即ちアミタ如來の事なり。

如來はいか成る本質性能なりやを明かにせば、宇宙全體これ如來の體なり。其の本質及び相と能との發展によりて多様の方面をなせり。

佛教に有爲を解脫して無爲に歸入し穢を厭ひ淨を欣ふ等は此意識設定する義なり。

有爲無爲を對比するに有爲とは世界體この相待規定の生滅の方面なり。世界は因縁に規定せられ因果律に支配せられて變轉窮りなく起伏隱顯定りなし。かゝる性能なるものには絶對依屬すべきに非ず。されば他に畢竟の依止處を求むべき義を意味す。無爲とは自性天真常住本然絶對無規定の義、宗教意識が絶對依屬すべき畢竟依止なるに名く。厭穢とは此世界及び衆生には厭離し脱却せざるべからざる垢質を有する性あるものとす。欣淨とは天然の世界的性質を脱して無垢清淨の靈界を欣ふて顯現すべき理に名づく。

また世界を方便化土と名づく所以は、現世界の相待規定にして天然に垢質ある此世界は如來法身より産出せられたる世界自からが目的にあらずして、如來の終局目的に到達すべき階級として要なる手段の爲として能ある故に方便化土と云ふ。

如來としての宇宙三方面

宗教意識には、如來を外にして、萬有一も有ることなしとすれば、現世界生滅變易なる世界體の中に於て、いかに全宇宙を觀察して常住不變の依處を求むべき。

獨尊統攝歸趣の理性なる如來を現世界に發見せんと欲せば全宇宙を三方面に區別して研究せざるべからず。

三方面とは實體と現世界と終局目的とす。

三方面に分けて能く研究する時は如來は此れ獨尊統攝歸趣の性能なること明かならん。

實體とは現世界に對していかなる性質なるやを明さんに、先づ實體は無爲、無爲とは自性天真本然本有、造作を離れたる絶對無規定の理性なり。實體を知らんには之に反する現象世界有爲の相を對比して見ん。

有爲は相待に規定せられ生滅變轉定りなき性質たるなり。實體無爲の自性を現宇宙に發見せんには之が根底たるもの何物か存せざるべからず。存在するものは即ち絶對

ならざるべからず。絶對なるものは他に規定せらるべきものに非ず。自性本然なりと云はざるを得ず。

さて實體を定めんには現世界相待規定の萬有を總括する自然の總體をさして實體と爲すか、又現世界を總括せる總體を超て寂然不動の方面に實體と定むべきか、將た雙方を統一的に實體を求むべきかの三種の觀念あり。

自然教にては相待の現世界を以て實體と立て、超然主義の實體は世界と反對なる背面に在りとし、圓教の實體は相待世界に即したる絶對、絶對と相待との統中總合とす。

圓教には三方面より觀して三諦と名づく。

現象生滅の相待規定の萬有變轉無定の性を俗諦と曰ひ、之に對する觀念を假觀と名づけ、相待規定に對する絶對不動の方面を眞諦と曰ひ空觀と名づく。

眞と俗の二諦兩方面は本一體の兩面なれば元來離るべきものに非ず、人が兩面を別

ち觀するも本來實體は相即不離故と觀するが故に中觀と名づく。

象相の方面は種々に多様なべきも實體は同一なり。一體にして多方面あることを妨ぐべからず。

宇宙現世界の方面

現世界萬有は無始より以來相待に規定せられて空間的には因縁相互に關係し網狀を成して横に空間に連絡して邊際なく、時間には無始以來因果的に次第關聯し鎖狀を成して世界には成住壞空衆生には生住異滅窮盡なく、世界萬有小大となく此相待規定を離れて單獨に孤立するもの有ことなし、所謂の因縁所生の法即ち假とは此なり。

かゝる相待規定の物には其が秩序統一の理性なかるべからず。宇宙萬有は之に隨て動かざるものなく、又斯く秩序の整然たるを見れば此が統一の理性なかるべからず。相待規定なるものは自ら之を統一すべき理性にあらず。此よりは高等なる理性によつ

て統攝せらるものと言はざるべからず。之を統攝擔保する理性を法身と曰ふ。天則秩序世界萬有を統一する實體即ち一切の宗教的主體を總括する絶對主體なり。

吾人は天則理性として一切の宗教的主體を總括する絶對主體の一員なりとすれば世界過程の行路には一切の主體なる衆生心に對する終局目的に歸趣せしむべき理性なるべからず。

歸趣の理性

全宇宙は本一大法身の天則秩序に發展せられたる世界なりとせば現世界は唯物論者の唱ふ機械的世界觀の如くに世界は單に物的規定の流行のみに非ずして、精神生命をして向上發達せしむべき理性的動力の存することは、生物進化の歴史に見るべく又各自の理想として實現するに於て疑ふべからず。

天則の理性より發展せられたる個々は相互に生存競争し動物生活より向上し心靈的

生活によりては個人目的以上に宇宙最深の終局目的に歸入すべき理性の存することは自ら明なるにあらずや。

吾人の理想は絶對の眞理を認めんことを求めまた之と融合し此が勢力に協心して活きんことを希望するにあらずや。

宇宙最深の終局目的の理性の勢能は個々の心靈を規律に隨て開展し宇宙即如來の目的に協力せんものとすれば、此に添はんとする人は相待的に無力なる個人目的を犠牲にして宇宙の一大目的を以て自己の目的とせざるべからず。

進化説によらば世界の發達史が無機物より有機物にすゝみ有機物が植物動物生活となり進みては人類心靈生活に向上し聖人賢人を出して心靈を向上せしむるは宇宙目的が世界に現れたるにあらずや。

佛教に天則秩序の世界を方便有餘と名づくるは此世界過程に終局目的あるべき階級の方便土なり。眞實の歸趣終局目的の實現は實在解脱によつて現はるべく然も眞實の

終局目的の生活に歸趣せんが爲なり。

方便化土たる世界過程には一切の心靈を開展せる理性含蓄せり。かゝる終局目的に歸趣せしむべき宇宙的の性能を具象的に如來本願力と名づく。

また如來の法身般若解脫の三大とはこの一切の心靈を開發して終局目的に吸收する處の勢力に外ならず。

如來の終局の三大は宇宙即ち法界に周遍せり。之に攝取せらる心靈は解脫して眞理の終局大涅槃に歸入することをう。

人は天則秩序の理性即ち佛性を具備するも天然のまゝにては自ら開發解脫す可らず殊に天然には無明垢質具備す靈性を開發し惡質を解脫靈化するは如來終局目的の理性たる三大の力によらざるべからず。

終局の目的に隨はざるものは靈能を具有するも惡質の爲に覆はれて空しく三界の苦輪に流轉して止ことなしと。

若し生物にして天則の理性即ち佛性有ことなく單に煩惱と業力とのみの存在とすれば物質の原素の合散によりて生滅して棄人形の如くにして滅無に歸せん。また獄火に焼つくして跡方もなきに至るべく、然れども理性あらんかぎり皆無になす能はず、故に輪廻説の止を得ざる理なり。

人自ら天則の理性を豫備し終局目的の理性として自己の理想として最眞最善最美の極に達せんと欲せば如來の目的なる三大勢力に歸せざるべからず。

一切無碍人同一涅槃門　三世一切薄伽梵一路涅槃門

宇宙三方面

實體としては絶對無規定自性天眞これ宇宙の眞體萬有の本體一切これに出でざるもの有ことなく唯一獨尊なり如來自己なり。

實體が自ら相と用との屬性ありて其天則秩序に宇宙現世界を開發す。現宇宙は實體

と同じく相待に規定せられながらも因果生滅して無始無終に變轉窮りなし。この天則秩序の統一の理性あるが故に統攝と名づく。

天則秩序の理性より相待規定せられながら萬有には終局目的に歸趣すべき理性が世界過程に包含す。之を如來三大と名づく。この理性によりて終局に歸趣す。

如來三身の中に天則秩序の統一の理性としては法身如來藏と名づく。終局目的の歸趣の理性とし爲に涅槃三徳と名づく。

相と用とについて三身といふも其實は一體の**アミダ**如來なり。

故に楞伽經に十方一切法報應及變化身皆阿彌陀國より生ずと。

楞伽經に説く處の如來は唯一獨尊にして一切世界及佛陀を統攝し萬有が終局に歸趣すべき處の如來なり。これを法性法身と名づく。大經の法藏の因位十却の正覺位は方便法身なり。

已に開會したる十二光佛の如來は本迹一致の體なりとす。

實體の詳論

實體の名義甚だ多し、或は眞如、法性、法身、如來藏、妙眞如性、一大心靈、絕對精神、宇宙眞心、等なり。實體の概念を表せんが爲の名詞なり。

實體は三性の中には圓成實性なり。絕對なるものは實體にして相待規定の依他起性とは簡ばざるべからず。

一切相待規定即ち因緣所成のものたる宇宙現世界は相互の關係に依て相成す。絕對は實體格に無規定なるが故に自己と一なり。全一の故に有より無に轉せず。常恒全一なれば圓成實性と名づく。依他起性の規定に隨て轉變するものと相同じからず。

起信論に心眞如一眞法界如理虛融平等の心性と云ひ心性は不生不滅差別の相あることなし。實體自身には主觀もなく客觀もなく絕對永恒自爾の理體なり之を眞如と名づく。名字を離れ相貌を離る。名と相とは人の之に對する觀念より自から強て名を付し

相を見るのみ。實體は本來言語の相なく畢竟平等にして變易なく破壊すべからず。唯是一心なり。眞如の體は名も相も無し。言も遣るべきなし一切の法悉く皆眞なるが故に。さればとて更に立べきものなし一切の法皆同じく如なるを以ての故に。實體は說べからず念すべからず。言語は眞に非ず意識は如に非ざるが故に。若し是の如きの義ならば衆生はいかがして隨順して而も能く得入せん。答て曰く法の實性は説くと雖說べからず念すといへども能念の念すべき無し。是を隨順と名づく。

若し念を離ることを名づけて得入と爲す、言と念との實は能所が離れたるなり。唯眞如は觀念によつて能念所念一致したる證のみありて眞如に契合するのみ。

この實體の本質を詮表するに二義あり。

一、如實空。能く究竟して眞實の體を顯はす。

二、如實不空。自體無漏の性徳を具足する故に。

其本質は自然律の形式なる時間空間及び一切因果律より發する物質を超絶せる一切

差別の相を離れたる虚妄の心念なき故に眞如の自性非有非無乃至總じて相待差別の概念と相應せず。若し差別の妄念を離れば實に空すべきなき故に。超時間超空間超物質にして而も一切を包括せる遍時間遍空間遍動力態なり。

如實不空とは積極に表す自性本然永恒自中存在の心靈態なり。信論に實體は眞心妄なし即ち是眞心常恒不變淨法満足するを不空と名づく。

眞如とは絶對心靈にして中に非ず外に非ず自體に一切活動の主體にして一切萬有に自體として觀念態即ち精神態として存在す。

常恒とは時間の形式を超たる絶對同時態なり。心靈態とは眞心常恒自體の中に活動し空間時間等の一切の形式及び一切を産出す。

宇宙の本質たる心靈態は其自體に無邊の性能を具備し眞空の一片のみに非ずして不空の故に一切を産出す。

また本質は無定相にして實相なり。無相は相として相ならざるはなし。故に一切の

定相は之より生ず。自體無規定にて一切を規定する本質なり。

實體に二方面あり。即ち常恒不動と隨緣顯動との兩面なり。絶對依止處としては前者にして客觀顯動界の生滅の中に一切處に徧して攝取の活動力を普く及すには後のを要す。如來の一切慧能なる動力徧在なれば一切處として恩寵の被らざるはなし。

世界の生滅起伏の中に於て何の處何の時にても恩寵に接せざるなし。經に『如來是法界身、入一切衆生心想中』如來の眞質は法界身に在しせば宇宙何の處か如來の中にあらざらん。宇宙として如來ならざるなきも、如來の本質は心靈態なる故に、直接に接せんとせば心理的啓示によらざるべからず。物質客觀界に發見せんとする非なるを知らざるべからず。『彼佛光明無量照十方國無所障礙』光明遍照十方世界。」

如來永恒不變の方面は常住本然不生不滅般涅槃界なり。宗教意識が常住安立の城廓を構へんには此方面にあり。自己の中に顯動と不動とを有しこれを娑婆に即して常寂光土を有す。觀經に如來去此不遠とは此なり。

一面が常恒顯動たるに拘はらず他の一方には常寂靜にして無爲涅槃界なり。法華經に「衆生却盡て大火に焚るる時も我此土は安穩なり」亦「我三界の如くに三界を見ず、如實に三界の相を知見す」と。

天則秩序に顯現せる世界因由

宇宙全體如來にして三方面を有し實體は絶對無規定にして象と力との二屬性を具す。之を體相用の三大と名つく。

本質が精神態なる故に二屬性は絶對觀念と絶對意志となす。此三大を以て宇宙をなす。現世界即ち客觀世界の相は絶對觀念が絶對の意志の力によりて實現せられたる客觀的觀念の實在なり。一切の心象は主觀的觀念の實現なり。

宇宙物心の二象は絶對觀念の二方面に現じたるものにして宇宙一切の能力は絶對意志の力なり。各個人は絶對觀念の特殊なる一員にして個體意志には全部觀念を現はす

べき務あり。宇宙として實現せるは絶對意志の總なり。

無明業力とは人の方より名づけたるものにして宇宙自體が盲目的活動と云ことに非ず。實は如來藏性の活動力の理論的規律即ち天則秩序によりて實現的に發動す。

宇宙現象界は天則秩序の理性として遍動力より秩序的に萬物を産出し開展す。常に天則秩序の中には一切智の添はざるなし。

藏性は無明にあらざるも發生せられたる萬物は一切智によりて賦せられたる知も未だ開展せざる程は不識的にして意識といふべからず。

例せば局部意志の實現たる人の精神生活に於ても根本は元來目的と手段の寫象を有せざる盲目的衝動として生活を規定せしなり。知力は生理機制の神經系統が開發しての後に屬すと云はざるべからず。

天則と歸趣　　流轉と還滅

絕對心靈が天則秩序に因果律的に世界を發展するには相大絕對觀念が用大意志に實現せられたる意志の力を本として發動せしが故に主觀觀念態は潛伏態にして、意志の活動力により規定によりて萬物は活動するも不識的なり。

終局目的即ち如來の眞理に歸趣せん時には絕對觀念は一切慧となりてこれに添ひたる所の人の心靈を開發して如實の理に照して還元することを得せしむ。

天則の流轉には意志力を本として觀念は伏力なり。

還滅の理性には觀念の光明によりて意志の能力を導く。

一切慧と能とによりて實體は生滅の世界を轉じたり。而して慧は萬有の理想的内容として理性的なり。一切能の動力によりて顯動界をなす。

天則秩序を統一すること

法身如來藏とは天則秩序を統一する理體の義にて、體相用即ち宇宙精神に觀念と意

志との二屬性を有する本體。

天則秩序萬有を統括し一切の大小時間空間の形式により因果律の關係を規定する統一の理性なり。故に宇宙現象界隱顯起伏の萬有は外觀すれば森然たる萬象各特殊の如くなるも内面は不可割に統一せらる。

天則秩序の統一の理性とは非理性無法に物質的分子が盲目的に聚合して偶然に生ぜし結果にあらざるべし。此が秩序をなすべき理性たる一大法身が因縁規定の根底理性として萬有は各法身を根底とする特殊の一員にして天則の命に隨て左右せらるべき理性を付せられたるなるべし。

相待生滅の萬有は法身を根底とせざるなくまたこれに統一擔保せられざるものなきとすれば法身は一切を包含して餘すことなき全能なるを知る故に法身の威力は無限にしてすべての物に超へたり。然らば之に歸依信賴せんには最大の力を得ん。

各自は一として之に依て生じ存せられたる者とすればかゝる絶對絶妙の全能者の意

に乖むく如きは甚だ非理にして還つて之に歸依信頼の正當なることをしらん。

しかるに天則に隨ふの正理なると共に尙進んで考へば天則と秩序の理性は萬有を向上發達せしめて終局には如來の眞理の目的に歸趣せしむべき手段なるが故に常に天則に一任するの消極的信頼に止まらず進では積極的に如來の目的たる歸趣の理性に順はざるべからず。

天則の秩序の理性には如來の一大勢力に發展せられて無限より有限に絶對より個體に、個々は相待規定せられたる因果律に支配せられてかゝる規定の外に自由あることなきまでに陥れり。これを墮落と云べし。

一たび天然規定により生理機制は自由を得ざるも各自には絶對主體の一員たる個人として靈性の潜伏せるあり。また客體には終局目的の光として如來の三大の性能を以て一切を攝せんとす。苟も理性ある人天則に一任するのみにて満足を得べけんや。

天則秩序に宇宙現發の相

信論に如來藏能く一切の法を生じ一切の法を攝すと。如來藏性が顯動せる一方面に過ぎざる宇宙萬有が悉く天則秩序のよく整へるを見ても實に之が秩序の根底たる一大靈性の不可思議の功能に信伏せずんばあらず。また九蒼無窮の天涯を仰ぎて無限なる深玄幽邃の秘奥に驚嘆せざるを得ず。秩序を整てよく萬物を活動せしむ其深奥の本質は沈思默考すとも到達すること能はず。

深き思想を有する人はかゝる宇宙觀に對して物理的解釋に伏すること能はず。世の唯物論者ありて曰く現存の原理は本現存を構成する所の分子が偶合より發生したる時間の經過に隨て生物元子が偶然に聚合してより發生す。生物らの苦樂の感情の如きも分子の運動の變化に外ならず。分子の結合によりて生じ分散すれば死す。唯物質の分子が自然律によりて生滅すと。曰く若し單に分子の偶合より自然に生ずといふべから

す。事物が相互に關係するには其もののみの力に非ず。相待なるものの規定は此よりは高等の絶大なる力なる規定によらざれば能はざるべし。物質分子が相互のみにて造ること能はざるべし。いかゞして自然は分子を驅り集めて相互の關係をなさしむるやまた單に物質がいかがして有機體思想感情を有する生物を物質分子が偶合に生ずとは豈奇恠に非ずや。斯る不思議の造化の妙用は唯物的には決して理解すべきにあらず。

法身如來藏の能

一切に超絶する如來藏の全力にあらざれば能ふべきに非ず楞伽經に萬有は藏性によりて産出せられまた藏性を體とせざるもの有なしと。今略して其大意を抄せば自然と偶合にて萬有を成すべきに非ず。

佛弟子たる阿難子が問て吾世尊佛陀よ曾て楞伽山に於て大惠等の爲に說玉ひしに彼の外道等は常に自然と説く我は因縁と説く此因縁の義は彼らの境界にあらずと曰ひし

はいかなることなりしやとの間に答玉ふ。意は彼らが曰ふ自然は未だ眞理に非ず。いかにとなれば彼らは未だ萬物の相待的規定なる因縁の理をさへ明らめざる者なり。然るに單に自然に支配せらるゝ自然の功が萬有を起伏隱顯せしむると謂へり。未だし萬有は因縁の關係によりて成立す。すべてはこの規定を離れて孤立するものに非ず。

見よ横には因縁相互に規定して空間に徧く豎には因果相續して時間に徧す。因果規定も未だ究めざる者の自然とは盲目的自然にして自然の歸する處をしらず。さればとて因縁規定が萬物の造化の根本元理といふにはあらず。

この因縁規定または自然律を規定せしむべき最終の根底は至大至妙の一大元理なかるべからず。阿難と一切の因果微塵は心に因て成す故に又汝未だ猶一切浮塵幻化の相は當處に出生し隨處に滅盡す、幻と妄とを相と爲るも其性は眞に妙覺の體なりと云ことを知らざりしや。

是の如く五陰六入十二處十八界に至るまで因縁和合すれば妄に生じ縁離るれば妄に

滅す。かゝる生滅去來のもの本如來藏を體とせざるものなし。然らば五陰等は本如來藏にして之を離れて唯因縁と自然の性にあらざることを知らん。

色陰。身體を組織せる自然律が物質の原子を驅り集めて即ち動物組織の原子が和合すれば自然に動物と成りて活動するに非ずや身體を分析する時は數多の原子の外何物も存することなき明なるに非ずや。故に知る此身は衆質元素の聚合物たることを。答て曰くそは全く此身は諸の元素の聚合物たることは疑ひなし。然れども單に物質聚合のみにして生命となりて活動すべきものに非ず。すべて生命を造り元素を聚めて身體を組織すべき天則秩序を支配する理性なかるべからず。此如來藏性なり。

受陰。精神の感覺機能なるものも此感官機能とまた腦髓及び神經等を組織する分子が外より來る五塵の分子が神經を刺激して感覺を發すといふても元素を聚むる力また精妙なる感能をなすべきものは是藏性が一切知と能より天則秩序の理性として感覺作用をなすに非ずや。

想陰。想像及び感情に於ても腦髓及び神經を組織する分子の聚合より喜怒哀樂を發しまた微妙の感情美的感情神秘的感情また高尚なる理想新鮮なる活氣甚深悲壯の感動の如き單に物質分子の和合と自然とのみいふべからず。其根底は如來藏性を體とする之が一切知と能とのはたらきより生ずるに非ずや。

行陰。意志に於ても物質的腦髓分子また遺傳習等の因縁によりて意志と性格を規定するは然るべきも、其根底の藏性なくしていかでかく聖人賢者高德威信の如く、一人能く億兆の意志を左右すべき力を有する偉人の意志を作る藏性の力といはざるべからず。

識陰。知力に於ても内に腦髓分子あり、外に教育あり、外界の刺激によりて知を開發すべきも、人の知力となるべき理性は、如來藏性を根底とせざるべからず。是の如く一切の色身より、受想行識の精神機能を造るは、如來藏眞如の性に、一切知と能との理性ありて、これが天則によりて、發生したるといはざるべからず。

六根、本、如來藏

眼の視覺、耳の聽覺、鼻の嗅覺、舌の味覺、身の觸覺に於て、人の腦髓神經を組織する分子と、外界の五塵の分子との感應によりて、奇妙なる官能作用を起さしむるは單に自然と物質分子の和合といふべからず。是の如き精妙なる構造をなさしむる功能は、本如來藏の功にあらずや。人は造られたるものの奇妙を歎じて之を造化する妙用を思はず。故に單に物的の聚合たる自然とのみ謂へり。

十二處、本、如來藏

客觀界の物質の色聲香味觸、極微の分子ありて、人の視聽嗅味觸の五官に刺激して人に感覺を起さしむ。客觀の物象も主觀の感覺も同じく如來藏性が一切知と一切能とが内外兩面に現はれたるものに、この作用をなさしむるにあらずや。

五大、本、如來藏

宇宙自然界を組織する七大性ありて、本來本然として徧在せりと。堅固と濕潤と煖熱と動力と空隙體との五大性能と、見と、識との兩大性と、此七大性が能く一切業に循ひ縁に隨つて、質料と能力として、萬物を造化すといふも、此七大は本、如來藏眞如の性なり。

七大性とは、二大性に歸す。即絕對觀念と絕對意志態となり。此二大性は絕對精神なり。如來藏性の二屬性なり。七大、本、一體にして、宇宙精神の本質が相あるが故に、客觀の物象と主觀の心象と顯現し、意志の能力によりて活動す。經に、汝元如來藏性の一大靈體が湛然として法界に周徧し十虛を含吐することを識らず、寧ろ方所あらんや業に循つて發現す。

藏性の二大性が、天則秩序的時空間の形式因果規定によりて、大にしては天體無

窮の空間無數の星宿碁列し實に九天の無窮なる、天文學者が精算によれば、光線の速力が千五百萬年の長時間を要すべき距離の彼方に恒星あることを認めうると。しかれども之を全宇宙の無限に比する時は億々分の一とも言ふに足らざるべし。空間の無邊なる想像も及ばざる處ならん。

萬有各天則秩序に隨つて動かざるものなく、太陽は幾千の屬星を率ゐて或星を廻り、地球は私轉公轉して太陽をめぐり、小にして地球に生存する么少なる動植物に至るまで、一として天則に軋らざるものなく、またいかに微細なる植物また動物にても、藏性の力を離れて生存すべきものなく、いかに太陽の如き大なるものも、藏性を離れて生存すべきに非ず。いかに少なる植物を造るも、同じく宇宙全體の力を要すべく、太陽の大なるも宇宙の全體より見れば、小莖の植物を造化すと同じく、何を難しとし、何を易しと云ふべけん。一の植物を養ふためにも、宇宙全體より乃至一太陽系を造化して其力によらざるべからず。

自ら觀せよ。地球上の微細なる自身なるも、此一人を生存せしむるにも、全地球のみにて活くべきに非ず。太陽の力を仰ぐべく、太陽は宇宙全體即ち藏性の力を仰がざるべからず。故に自己一人の生存には全宇宙の力によらざれば能はざるなり。

如來藏天則造化の相

藏性の觀念、即ち一切智と一切能とによりて、世界を建設するは、法身の一切智は一切の萬有に含蓄して、自ら相なり、また造作す。一切知態は絕對意志の能の爲に秩序を整はしむ。

本來一切智は觀念態に天則秩序の理性に含蓄し、宇宙萬有に存在して、統一理性なれば、宇宙全體が唯一の體にして、萬有即ち自己なれば、自己が自己を造作す。萬有に自己存在して作用を施す。

宇宙萬有は本同一理性に統一せられ、絕對の備を以て造化施設す。天然界の天體星

宿より地球萬物が起伏隱顯常恒造作の完全なる、之藏性の力を以て萬有を造化す。常恒不斷に自動自活し、自養と消耗とは共に自己にありて、天則的に常に建設的衝合行はれ、永恒に無始無終にわたり、宇宙に比すればわづかなる太陽系統の秩序にも太陽が中心となりて他の遊星を運轉せしめ、地球運轉がよく秩序をなして時間を過たず、萬物造化と規律の完き、盲目的運動と云ふべからず。宇宙精神に一切智能の存在するとゆるさざれば解すべからず。

萬有は各小藏性

宇宙全一の藏性にして、統一的不可割の理性なることは勿論なれども、之を體とし之が能力によりて成立したる萬有なれば、大は天體の星宿より小は地球の動植物に至るまで、いかに乏少なる個體なりとも藏性を體としたる個々なれば、各自は小藏性小造化の用あり。天則によりて其分に應じたる知と能とを與へられたる限りに於ては、

個人は小造化たらざるべからず。微細なる植物も榮養と生殖の作用をなすは小造化にあらずや。たとひ太陽の如き大なるものたりとも宇宙藏性を離れ生活すべきものに非ず。

相待規定

藏性本全一なるも萬有は相待規定を離れて一も有ることなし。之を因縁所生の法と説く。

歸趣の理性 背塵向眞

天則秩序の世界に有せる一切の生物の生命は向上發達して人の理想と現はれ、人は精神生活を物質的解釋のみにては理想が満足を得ず。進んで人の精神は眞善美の極に到達せんことを希望し、心靈的に神の國を理想して、之を實現せんとして目的を立つ

るは、高尚なる理想を有する人の精神に實現するに於て證すべし。

天則秩序の理性に佛性を具備して造化すべき世界過程は、頓がて終局目的に歸趣せしむべき故に方便有餘。

人は天則の理性的に開發して生活すべきのみにあらず、進んで終局目的にしたがふべき理性が世界過程に含蓄するを知らず、唯人の生活は自然的にて天則秩序に隨ふのみを以て足れりとし、また天則は宇宙の眞理、この天則によらずして生存すべきものに非ず、之に反抗する如きは得べきはづなし。依つて天則の理性に隨順するは天理なり。故に天命に一任せば可なりと、いはゆる運命は自己の力の能はざる處、諺に天にまかせると云ふは、即ち天則に一任するなり。かゝる消極の依頼に甘んぜず、進んで積極的に宇宙なる如來の終局目的の理性に歸依信賴して後に初めて、最終の眞理に隨順したるものと言ふべし。

天則と歸趣の理性とは、如來の一切知と能とによりて常恒に發展せらるる天則の理

性は絶對無限の心靈界より相待の感覺的方面に向つて發現す。現に人の天性は塵に向ふ。佛教にて之を眞に背きて塵に向ふと曰ふ。塵とは五塵即ち感覺。吾人の天性は感覺に向ふ。生理機制の官感が無限を背にして有限の狭き方面を感覺するなり。

本來宇宙は如來法身にして、絶對無限にして、吾人の感覺機能は生理機制に局限せられて眞面目を觀する能はず。プラトーンが「人は牖に立て表を背にして壁に向つて見るが如し」と。吾人が視官は空間を見るに廣き方に向ふ如くなるも其實は爾らず。感官は機制に局限せられて、無限の空間、際限をなして甚だ廣からず。適天は圓形にして天地接するが如くに見ゆ。宇宙は人の感官に現するほど狭きものならんや。然るに吾人心を轉じて冥想觀念する時は、空間の廣大なる無限と云ふ外なきなり。

宇宙の本質は大觀念によりて觀すべき外なし。吾人が感覺は宇宙の或一方面を見るの外に知る由なし。かゝる拙劣なる官能を以て宇宙の眞理全體を経験せりと謂ふが如きは狂ならずして何ぞや。

感覺は空間的に於て爾るのみに非ず。全く自己の生理機制的に、動物祖先の時代より發達したるものなれば、肉の生命保存を目的とする外に、深き能なきものとす。故に此は個人の目的の外に肉及び我欲の外に功能あるなし。

人の天然また本能は此方面のみに發達し、これを以て精神全生活と認るを迷と云ふ。宇宙理性の終局目的に心靈を展開して歸趣の理性あることを明めざるが爲なり。

人の天然は生理的感覺の方面に、意向を以て標準とする立脚地を定むるが故に、塵に向つて眞に背けりと爲す。

進んで宗教の心靈開發して、之が理想及び希望する處は、無限を豫想し、感覺界のみにて満足得べきにあらず、心靈界の眞善美に達せんと欲する時は、超感覺界に無上の神の國を豫想して、之を實現せんことを目的とす。心靈は有限機制的の感官の中より無限の觀念界に向つて希望の對象とす、絶対に致一するにあらざれば止むべからざる眞善美の極に達するを目的とす。故に心靈は塵に背きて眞に向ふと。

無限實體を根底としながら個人感官的生活に安立するを眞に背き塵に向ふと云ひ、一たび個人的感能的生活の立脚地より心靈的生活の眞理の目的に向ふを塵に背きて眞に向ふと名づく。

人の天然的生活には天則秩序の理性あるも、生理的感官的欲望等にして肉の生命を目的として、心靈は潜伏態にして、精神は肉體生命を保護する官に過ぎざるが如し。歸趣の理性としては、心靈を開發して、靈が顯動態となりては、肉によるすべての精神機能は、心靈生活の手段たるに至る。此を倫理にて、人間の自由は心靈をして動物的欲望を支配せしむるにありとは此事なり。

個人の精神生活に於て、天則的のは如來一切能に發展せられたる動物的生命にして、智慧は潜伏態なり。歸趣の理性としては智慧が顯動態となりて、動物的精神を指導す。甲を流轉門と名づけ、乙を還滅門と名づく。

目的と因果

天則秩序の理性より、世界過程に萬類の生命は向上發達する性能の具するは、終局目的の天則に含蓄せるが故なり。外觀すれば因果律に進化する如くなるも、宇宙如來の終局目的として、一切慧の光と合して、一切の心靈を開展し其目的に協力せしむべき理性ありと言はざるべからず。此に協力する衆生は個人目的を犠牲にして、如來目的に隨はざるべからず。

天則秩序より、相待の規定の萬有の、因果律に支配せらるる人の精神過程に於ても、因果律に行はる。向上發達するあり、また向上せざるあり。

天則秩序の理性に一切慧能が含蓄して、心靈を開發して終局目的に歸趣せしむ。

因果と目的とは、其本絶對理性によりて、同一の根底より、機械的世界過程には因果にして、宗教には如來の目的の理性を立て、其目的に隨ふものは攝取せられるもの

とす。秩序の中に如來の目的即ち攝取の理性が含蓄するを知らば、歸依信順の因に、終局目的に攝化せらるる果を得るに至るとすれば、因果即ち目的なり。

天則秩序の中に心靈生活が向上發達するは即ち如來の目的に隨順するなり。心靈開展して目的に協力する者は真理の光に指導せられ盲目的因果律に支配せらるるものと異れり。意識的に真理の理性に歸趣するものなり。

終局目的の如來の性能

宇宙即ち如來の一大心靈體に、一切慧と能との三大が、一方には天則秩序の世界を發展して、相待規定の中に生滅起伏する萬類の生活を天則的已上に向上發達せしむるは、終局目的に如來の自己に歸趣せしむべき手段なりとすれば、統一的理性に含蓄せる如來の目的に攝取せん爲には、宇宙心靈の三大は、天則に顯はるゝよりは高等にして、此を法身と般若と解脱の三大とす。

是三大は法爾として宇宙に含著せる理性、此三大よく衆生を終局に歸趣せしむる光なり。

無量光と無邊光と無碍光とは是なり。是を報身の三徳また涅槃の三徳と名づく。是の如きの本質性能は宇宙の本質性能として觀念態に存在せり。

法 身

法身とは天則秩序の統一の理性と其體同一なり。世界萬類は此實體を體としながら、意志の力によりて發現せられたる無明に覆はれて、自己の根底をしらざりき。此體を離れて萬有一として存在すべき理あることなし。天則には、自性の本眞に背きて塵に向つて無限をすてゝ有限に、自己の根底を忘れて個體に執せり。しかれども各自の根底は一大心靈態を以て體とするが故に、歸趣の理性としては、個人の根底に向て眞理の本體に達せんとす。各自は此理性を根底とするが故に如來の佛性具備す。一切衆生

悉有佛性とは云ふ。

觀經に、是心是佛とは、是如來の一大法身と繋れるが故なり。

信論に、眞如の體とは眞如平等畢竟同一の理體、凡夫に在て滅せず、諸佛に在て増さず。

衆生一大法身の如來に歸せんには、客觀に求むべからず、自己の心靈の根底なる一大心靈即如來の本質なり。故に接せんには佛知見啓發して大自觀的に親接することを得ん。

如來一大法身に歸趣せしむべき豫備として、萬類に佛性を付せり。これを歸趣せんには天然的には自から入るべからず。これが軌律にしたがはざるべからず。

個人が天則より一大法身に歸元せしむべき理性あるが故に、これを歸趣の法身と名づく。此正規に則りて三世諸佛は正覺を成す。

歸元の正軌とは、吾人が信仰即ち三心は、個體なり。個體心の根底なる如來は、全

體なり。自觀的に觀する時心靈開發するは個體と全體とは共通すべき理性あるが故に軌とるべきなり。個人心靈が一大心靈を觀するが故に、感應して大自觀と靈通す。

吾人本覺の理性、法身より付せられたる理性は潛伏態なり。如來眞理の光明即無量光の觀念にて、心靈開發する時は、一大心靈如來の一大法身と契合す。信論等に、究竟して一心の理を覺り、故に始覺の智還つて本覺に同す。既に始本不二を以ての故に眞如に冥合す。已に如來に歸命する時能所一致、一大法身、超時間超空間永恒心靈態とす。

歸趣の理性には如來一切慧即ち般若の光を以て個人の心靈を覺醒す。此一切慧光が自觀と大自觀と靈微妙照、如來即ち宇宙一切慧の四方面より個人の四面に照す。この慧光本來法界に周徧して人の心靈を開展し、此光によりて自己の四智と現はる。如來の四智は個人心靈に顯現するは無邊光の下に論せん。

解脱の光とは、如來の聖意態として、法界に周徧する心靈態なり。天則秩序には萬

有造作及び運動の能として、終局の性能としては、如來の解脱の力として、衆生の心の惡質を脱却し靈化する功能なり。是事は無碍光の下に悉しく説明せん。

三大は本より宇宙の本質即ち如來の本質性能にして、天則の理性と同じく、終局の光として、宇宙心態及び一切慧一切能、即ち絕對心靈と、及び觀念態意志態として遍照す。是本如來本地の性能なり。

本迹二身の歸趣の性能

如來に本迹二身を立ることは、楞伽に所説、阿彌陀如來は本佛にして、三身の本體、即ち法性法身、本然自爾如來。論註の法性法身是なり。無上獨尊なり。

天則秩序の理性としては、法身と名づけ、終局目的の三徳の光明をなす時は、報身と名づけ、人格的應化には應身と名づく。三身は本一體なれども自由の力を以て衆生の爲に三身を示す。

本佛如來が世界に對して、歸趣の性能として、三大の光明を以て常恒に一切を終局に攝する本質性能は、本然法爾として徧在することは、已に論じぬ。

此に於て法性法身本佛の一切慧と一切能、即ち智慧慈悲より、方便法身を示現して、衆生と如來との本來の關係を、具體的に親子の關係の如くに、大に宗教として恃怙あらしむ。

大經に説く處の五十三佛及世自在王佛より法藏比丘大願大行兆載永劫の酬因感果として十劫正覺を稱へたるまでを方便法身と名づく。

本佛とは楞伽に説たる如來にして、五十三及び法藏の因果のみに非ず、十方三世の法報應身は悉く一如來の方便法身に外ならず。

大經の十劫正覺に、淨土の莊嚴淨土の願行より成就せりとは、方便の方面より、因果律的に示したるなれども、法性本佛の目的より見れば、本然常然の常寂光土にして始成に非ず。

正覺の開會には始本不二なれば、方便法身が即法身本佛。本佛を現はす爲に方便法身を示したまふ。

本迹同一の如來なれば、西方の十劫正覺に歸命するは、即ち本佛去此不遠を信賴するなり。一たび絶對の本眞を背きて相待に規定せられたる萬類には、指方立相甚だ便利なり善巧なり、甚深難思仰いで信すべし。

六十萬億の眞金色、八萬の相好光明普く十方世界を照して、念佛衆生を攝取して捨て玉はず。七寶莊嚴の依報に至るまで、如來法身と般若と解脱との顯現なり。

眞金色の眞體は法身にして、相好光明は一切慧、光明攝取は解脱の徳を表す。吾人一心に如來に歸命する時、自ら己を捨て眞心顯はる。相好光明を觀する時、智慧開展す。念佛して攝取せらるるが故に解脱靈化する。

一心念佛して三昧に入る時、能所致一、若しは憶念、若しは口稱、如來と三昧的に機能致一する時は、全宇宙として如來の三大ならざる處なきを悟らん。

如來の光明遍照法界とは般若の德を表し、本願力とは如來の全能力を以て解脱し靈化する力を云ふ。